



14

枇
杷
天
満
宮

祭神は菅原道真すがわらみちざねですが、勧請年代は不明で、文政11（1828）年8月の大風で社殿転倒、天保14（1843）年再建、旧鳥居に安政6（1859）年の記録があります。

古書潜龍遺事に、第98代長慶天皇（1368年～1387年）の御蒙塵（変事に難を逃れること）の際に、筑前の国枇杷の庄に入るとの記録があります。



15

店
屋
の
渡
し

長崎街道赤地区の入口。参勤交代制度が確立された寛永12（1635）年から約100年間、南良津なつらづと赤地あかちを結ぶ渡しとして通行が行われた場所です。

明治時代になると、石炭を運ぶ川舟（五平太舟）船頭の立ち寄り場所となっていました。渡し場付近には大きな榎がありましたが、今では大樹も、渡しの面影も見ることができません。



16

赤
地
天
満
宮

長崎街道は元文元（1736）年の往還替までは、赤地渡し（店屋の渡し）から赤地村中へ続いていました。赤地天満宮は、その当時の面影を今に残す唯一の細道に面して建っています。建立の時や由来は確かではありません。

境内には、小竹町で一番大きな銀杏の大樹があり、胸高囲は5m60cmあります。



17

川
原
宗
榮
の
墓

赤地谷観音を最初に祀まつった宗榮は、長門国（山口県）の人で、九州巡国の折、赤地を有縁の地と定め、ここで生涯を終えました。

墓石は高さ1m余、幅50cm程の天然石で、俗名、戒名等は石室囲いで見えません。

貞享2（1685）年、子孫九右衛門によって墓碑が建立され今日に至っています。



18

谷
観
音
堂

享祿2（1529）年に遍歴者川原宗榮かわはらそうえいによって祀まつられたとあります。

略縁起によれば、創祀は文明13（1481）年、宗榮が観世音菩薩像を持って赤地の谷に一庵を結んだことによるそうです。

谷観音は、現在なお赤地区民によって信仰が進められています。